

## 序

本書は昨年四月の大会における発表を取纏め刊行するものである。さきに「交通の歴史地理」と題する紀要が出てから一二年を経過している。毎年、共同課題を設定して大会と紀要の刊行を行なつてきており、広く歴史地理学の各分野を取り上げる関係からこの程度の間隔になるのも止むを得ないことである。もちろん、交通関係の研究はこの間にも着実に進められており、会誌「歴史地理学」や紀要の他の号にもしばしば発表されている。たとえば紀要の二二号（河川・湖沼の歴史地理）に河川水運に関する論考三篇が収められたのはその一例である。

「交通の歴史地理」の折に目立った特色は、古代交通に関する論考が全体の半数に当る六篇を数えたことであつた。それまで歴史地理学の方で扱った交通の研究は著しく近世に偏り、古代関係は寥寥たるものであつたし、地名等を手掛りに駅の位置を推定する域に止まっていたものが広い幅をもつ直線状の計画的な道路が具体的に復原され、都城・国府や条里との関係も明らかにされるようになったのだからまさに画期的なものだったといえる。

それでは一二年を経て刊行された本書の特色はどこに求められるであろうか。対象地域に、時代に、分析視角に従来とは違う新しい傾向が多面的にみられるようになったことを指摘したい。古代と近世の間にあつて研究の谷間の感があつた中世庄園の交通、一般人でない修験道修行者の歩く道、為政者や業者の側ではなく旅する人の立場からの視点を旅日記に求めた研究、風や潮流等の自然条件と航路との関係等いずれも目新しい分野に歟を入れたものとして注目に値するし、交通に情

報も加えた課題に応えて遠いアンデスの通信が取り上げられたことも意義深いことであつた。

どの分野でもそうであるが研究が学際的になり、隣接諸学との交流が活発になつてきている。交通に關していえば交通史研究会と鉄道史学会が重要な役割を果している。史学・民俗学・経済史・経営学・技術史等の研究者に伍して、両会のいつの会にも歴史地理学者の参加があり、一方隣接諸学の研究者で本学会に参加される方も少くない。これは慶賀すべき傾向であり、今後とも関連諸学の研究者が手を取り合つて交通の諸問題の解明に邁進すべく、本書の刊行がそのためにも大きな役割を果すことを確信している。

刊行に当り遺憾にたえないのは元会長藤岡謙二郎先生の逝去である。「都市と交通路の歴史地理学的研究」や「古代日本の交通路」を著わされ、先年の共同課題「交通の歴史地理」の提唱者でもあつた先生は、久しぶりに交通關係を課題とした昨春の大会を目前にして世を去られた。謹んで本書を御霊前に捧げ、御冥福を祈る次第である。

本年も財団法人畠山文化財団から多額の助成金を頂いた。厚く感謝の意を表す。

昭和六十一年一月